NHK スペシャル　世界は私たちを忘れた　～追い詰められたシリア難民～

2020 年 10 月 24 日放送　50 分

導入　～3:09

2020 年 8 月 4 日　レバノン　ベイルートを襲った大規模爆発
死傷者は 6500 人を超え、隣国から逃れた多くのシリア難民が犠牲となりました。

戦禍のシリアから逃れてきたが、爆発で目の前で子どもを失った。
そして、新型コロナ　ウイルスの感染が、難民たちにも広がっています。

妻:夫は弱っている。熱で一晩中　一睡もしていないから。
夫:10　日前にコロナとわかった。診療所に行ったが、患者が多くて(病院の)負担が大きいと、自宅療養になった。

泣く女性・・

語り手:もっとも弱い立場の難民たちが苦境に立たされています。暮らしに行き詰まり、自らの臓器を売る人が増えています。(臓器売買　針跡のあるおなかが映し出される)

女性:もらったのは 14 万円だけ。
女性:生活のために、腎臓か角膜を売るしかなかった。

語り手:角膜や腎臓の売買。そして性を売り、傷つく女性たち。
女性:私は売春に頼った。子供のために。その客は「俺を喜ばせなければお前を殺す」と。怖くて怖くてたまらなかった。

語り手:非常事態宣言のもと、難民たちは生存の危機にさらされています。(難民の実情を伝えるため　焼身自殺の映像が流れます)　焼身自殺を図ったのは 9 人の家族を支える父親でした。

男性:神よ、なんてことだ。
息子:父は言った「もう耐えられらない・・・パン一袋も買えないようなこんな暮らしでいいのか？」
疎外感の中でシリア人たちは飢えで死んでいる。世界は確実に僕らのことを忘れている。何千人もが飢えで死にそうなんだ。

語り手:コロナの感染拡大が広がる世界で、置き去りにされるシリア難民の人々。その8ヶ月間の記録です。
タイトルが流れる「世界は私たちを忘れた　～追い詰められたシリア難民～」

臓器を売るための誘拐　3:09～14:18　　11 分＋5 分＝16 分

報告者　金本麻理子ディレクター:2020 年 1 月、レバノンでの取材を始めました。向かったのはベイルートから車で 1 時間半、シリアとの国境が近い(難民キャンプがある)ベガー県です。
ビニールを張っただけの簡易な非公式難民キャンプ。隣国のレバノンにはシリアから多くの難民が押し寄せ、その数は推定 120～160 万人です。現在レバノンの人口の 4 人に一人はシリア人と言われ、キャンプでは常に過密な状態が続いています。

男性:飲み水はテントごとに10日間で 1 つの容器だけ。3 日分くらいしかない。7日間は水不足だ。

ベカーで一人のシリア難民の少女と出会いました。エルハーム(仮名)は 11 歳。5 年前に密かにシリアから逃れてきました。

エルハーム:シリアは、(雪山のある方を指さしながら)あっちの方かな？　シリアの方が良かった。みんな一緒だったし。ここでは誰も助け合わない。自分のことで精一杯。ここでは私たちは疲れ果てた。祖国に帰りたいけど・・・(内戦の動画)

語り手:祖国シリアの内戦が始まったのは、9 年前、2011 年 3 月、自由を求める大規模なデモを政府軍は武力で弾圧します。過激な組織に外国の利害が絡み、内戦は泥沼化していきます。9 年間で死者は38万人を超え、660万にのぼるシリア難民が国外へ逃れました。　5:43

金本ディレクター:(ヨルダンでの写真)私はシリア難民の人々を、2012 年から追ってきました。心に刺さったのは祖国を離れて苦しむ難民の子供と、女性たちの姿でした。近年、レバノンに暮らす難民たちが、困窮を極めていると聞き、ベガー県を尋ねたのです。

語り手:エルハームは、8人家族の長女です。父親は連日、日雇いの仕事を探しています。エルハームには 1 つ年上の兄がいました。しかし、去年、衝撃的な事件に巻き込まれます。その日の夕方、家の前の庭で遊んでいた兄は、何者かに連れ去られてしまったのです。

エルハーム:くまなく探し回ったけど、お兄ちゃんは見つからなかった。何もわからなかった。でも、お兄ちゃんは生きてるはずだと思ってた。(目頭を抑え涙を浮かべる)

語り手:その後、兄の行方は Facebook の投稿写真でわかりました。ゴミ捨て場に放置された兄の死体が写っていたのです。

母:ゴミ箱のそばに息子を見つけた。あの子は横たわっていた。(間)シャツが上にまくられて、ズボンが短く切られていた。お腹に何かされてた。ああ神よ、決して彼らを許しませんように。(腹部を触りながら)ここを縫われていた。欲しいのなら、私の腎臓をあげたのに。(嗚咽。下の娘がすり寄る。エルハームも目頭を抑える。母がエルハームを抱き寄せる)

エルハーム(部屋の外で話す):お兄ちゃんがかわいそう。心臓も肝臓も取られたかも？　目も高く売れるんだって。心臓もとても高く売れる。私たちがシリア人だから、誰かが言っていた。「誘拐されたのはシリア人？　レバノン人？　シリア人なら別にいいや」って。私はその人に言った。「同じ体と血じゃないの？　シリア人もレバノン人も同じ人間でしょ？」　でも、お兄ちゃんが戻ってこないことは確か。私が家族を支えなくちゃ。お母さんはとても疲れているから助けたいの。本当は働きたくないけど私が働かないと、家族と妹たちが満足に暮らせるように。

(別の日)エルハーム:行ってきます。妹たちの世話をお願い。(母とキスをして出かける)
語り手:一家の働き手を失い、さらに厳しくなった家計を支えようと、エルハームは妹と農家の仕事に出かけるようになりました。(トラックに乗る姉妹)　この日、作業をするのはキャベツ畑です。

畑の指導者:急いで、急いで。
エルハーム:ちゃんと切らなくちゃ。

語り手:エルハームはまだ農作業に慣れていません。朝 7 時半から夕方まで働き、妹と二人でおよそ 400 円になります。学校に通うことはなく、収穫期には毎日畑に出ています。共に働くのは兄の仲間たちです。

男の子:僕は君のお兄ちゃんが大好きだった。　(他の子)　ここにいたらいいのに。うん、本当に誘拐のせい。
エルハーム:誘拐犯に罰が下りますように。一番美しいのは過去、戻れたらいいのに。

語り手：シリア難民の児童誘拐は、ベーカ県周辺でたびたび起きていました。

難民キャンプの男の子：（誘拐犯）は女性の服を着ている。

語り手：街の防犯カメラには、女装した誘拐犯が女の子にジュースを渡し、手を引いていく様子が写っていました。誘拐され、臓器を取られた子供の写真が、Facebook に上がることもあると言います。

男の子：見つけた人が気をつけるようにと投稿したんだ。

語り手：この少年は、連れ去られた 4 日後、遺体となってゴミ捨て場で見つかったと言います。

難民キャンプの母親：誘拐犯は子供で稼いでいる。子供の腎臓を売ってね。

語り手：（内戦の様子が映し出される）　近年、レバノンでは経済危機が深刻化していました。政治の腐敗に国民の不満は爆発。大規模なデモが拡大します。多くの難民が労働市場を圧迫してきたとして、レバノン政府は（難民の）シリアへの帰還を促進、雇用の場も厳しく制限されることになりました。　追い詰められた果てに、自らの臓器を売る難民もいました。去年、働いていた店を解雇された男性は、仲介者を頼り、およそ30万円を受け取って腎臓の摘出手術を受けました。（手術あとの縫い目が映される）
男性：母の治療のために腎臓を売った。母はガンだった。何でも値上がりして家賃も払えない。借金して家賃を払っている。手術後、痛みで苦しんだ。でも、後悔はしていない。母が治療できたから。シリアは状況も厳しいけど、僕らは戦争から逃れ、別の戦争に来た。　14：18

新型コロナ・ウイルスの感染拡大の影響
（街を消毒する車が映される）
金本ディレクター：取材をして3ヶ月、思わぬ事態に陥りました。新型コロナウイルスの感染拡大です。3 月 15 日、レバノン政府は非常事態を宣言。国境も封鎖され、帰国の目処も立たなくなりました。薬局とスーパーを除く、ほとんどの店も閉められました。生活苦に悩んできたシリア難民たちは、一体どうなってしまうのか？　難民キャンプを訪ねました。クラスターの発生を警戒し、
消毒作業が行われていましたが、マスクなどの支援は行き届いていませんでした。

男性：消毒できるものが欲しい。石鹸すらない。
女性：マスクが代わりにスカーフをつけている。マスクを買うお金なんてないから。

語り手：外出の自粛を求められ、難民たちも仕事に行けない日々が続いていました。（兄を失った）エルハームはずっと家の中で過ごしていました。（泣いている下の子をあやす）

エルハーム：コロナで多くの人が病気になって私たちは外に出られない。仕事は全てなくなった。

母親：息子のことをずっと考え続けてしまう。（嗚咽）

語り手：母親は塞ぎ込むようになっていました。

エルハーム：母親はとても疲れている。こんな状況でとても、とても悲しい。コロナがあって、この貧しさ。今、想像以上にひどい貧しさなの。どうすればいいか？　私たちには何もできない。

語り手：3 月下旬、ベカー県の難民キャンプで事件が起こります。キャンプが襲撃されたというのです。被害

にあった難民たちが避難していました。
頭部などに怪我を負わされた男の人たち:レバノン人にやられた。
男の人:棒でやられたんだ。7針も縫った。

語り手:棒や石で殴られ、深傷を負った人もいました。
男の人:「お前らシリア人は出て行け」って。彼らは殴り始めた。シリア人への差別だ。シリア人だと殴られる。彼らはキャンプを焼こうとした。火をつけようとしたんだ。

語り手:キャンプを襲ったのは 20 代の普通の青年たちでした。最初は、数人の些細な口論でしたが、仲間が集まり、エスカレートしたと言います。
キャンプを襲撃した青年たちの証言:今回のことは悪かったと後悔している。でも、彼らにも問題がある。暖房のために靴もプラスチックも一緒に燃やしてしまう。コロナの影響もある。仕事がなくなった。シリア人のせいで仕事がなくなったんだ。病気を持ち込まれることに我慢できない。彼らは病気の源だ。
語り手:エルハームの妹も、近所のレバノン人の子供達に取り囲まれた、と言います。
エルハーム:抱いていた妹を殴られるのが怖かった。

妹:私は殴られた。でもお姉ちゃんが助けに来てくれた。
エルハーム:コロナの感染が多くなったから、その子たちは私たちを「バイ菌」って呼ぶ。「ゴキブリのようだ」とも言われた。ゴキブリよ、ゴキブリ。私たちは、アリやゴキブリ、排水口から出てくる虫のようだと。辛いけどお母さんを悲しませたくないから言わないの。家族を問題に巻き込みたくないの。でも、この言葉はとても傷ついた。こんな最低な気持ちはありません。(涙ぐむ)

金本ディレクター:コロナが感染する中で、レバノン人の不満の矛先は難民たちへと向けられていました。特に、弱い立場の子供たちは、家族のために働きながら誘拐や迫害の危険にさらされています。国際人権 NGO は(2020 年 4 月　ヒューマン・ライツ・ウオッチ)レバノンのシリア難民へのコロナ禍での対応は差別的だと警告。複数の自治体が難民にだけ行きすぎた外出禁止令を出している、としている。彼らに救いの手は届かないのか？　いくつもの支援団体を回りましたが、コロナの影響もあって十分に機能しているところはありませんでした。そうした中、一人の難民女性がキャンプで暮らす女性たちの相談役になっていると聞き尋ねました。　21:21

語り手:この家の主人、マラク(仮名)さん。夫は 6 年目にシリアでの爆撃で亡くなりました。

マラク:(息子たちに)お腹がすいた？　料理が終わるまで我慢できない？
語り手:マラクは女手一つで4人の子どもを学校に通わせています。子どもたちを連れてレバノン　に逃げてきたのは 5 年前のことでした。

マラク:私がレバノンに来たとき、コップさえ持っていなかった。子供の服は、一人一枚だけポリ袋に入れて持ってきた。掃除の仕事があると聞けば出かけ、裁縫も頼まれたらすぐに行った。それから私は強くなり始めた。

語り手:マラクは近隣のレバノン人から仕立ての注文を取り、生計を立てています。

マラク:この仕事(裁縫)が大好き。夢はいつかシリア人の少女たちに裁縫を教えること。技術を身につければ売春から抜け出せるでしょう。

語り手:マラクの家を頻繁に相談に訪ねる少女がいました。ハナーン(仮名)は 17 歳、家計のために売春をしています。その腕には、いくつもの切り傷がありました。

ハナーン：少し良くなったけど、腕が傷だらけなの。
マラク：ナイフで（やられたの？）？
ハナーン：「仕事が見つからなくてお金がない」と兄に言ったら、ナイフで切り付けてきた。コロナで仕事もできない。全然仕事がないの。
マラク：お兄さんはまだお金を持って来いって言うの？
ハナーン：お金を渡さないと殴られる。その時はすごく怖かった。（涙） お金がなければ家に帰れない。兄が変わったのはレバノンに来てから。いつも私を殴ったり、お金を求めたりして・・・なぜ、兄は変わってしまったのか？ どうしてこんなことに？と思う。そして男性と寝るようになった自分を憎んでいる。

難民キャンプの部屋に戻る。
語り手：ハナーンは、母と兄弟四人で暮らしています。 お母さん 調子はどう？
母：とてもだるいわ。

語り手：母親は、心臓病と糖尿病を患い、起き上がることもままなりません。父親はレバノン に来てから、家を出て行きました。
ハナーン：お兄ちゃんは灯油を買ってきた？ （母は首を振る）
ハナーン：お金を渡したのに。
母：あなたが買ってくるって言ってた。生活費や妹たちに必要なものは、この子が持ってきてくれる。娘に全てを背負わせてる。
語り手：妹たちは学校にも通えていません。
弟：お姉ちゃんが帰ってくるまで、ずっとお腹がすいている。

語り手：夜、兄が帰ってきた。3 つ上の兄、ムスタファ（仮名）。最近、毎晩、酔ったまま帰宅しています。イスラム教徒のムスタファは、シリアでは口にしなかった酒をここにきてから飲むようになっていました。
弟：さあ、食べて。
兄：今日、お金はどうした？ （ハナーンに詰め寄る）
ハナーン：仕事がなかった。
語り手：帰ってくると決まって、ハナーンに金を求めます。

母：誰も叩くなって、1000 回言ってるでしょう。
ムスタファ：あんたは黙れ。
母：私に黙れって？
ハナーン：弟を叩かないで。（大きな音がする）
母：神にお前への文句を言うわ。（ハナーンは目頭を押さえる） 神が罰を下してくださる。
ムスタファ：（弟を叩きながら） もう食い物、置けよ。（皿を投げる）
語り手：（ハナーンが絨毯を掃除し皿を片付ける） 酒が入ると乱暴な振る舞いをするムスタファ。その存在に家族はおびえ、疲れ切っていました。

雪が降る中を一人歩くハナーン。
語り手：苦しくなると、ハナーンは時々、ここへやって来ます。シリアでの幼い日々、ムスタファと雪景色の中で、よく遊んだと言います。

ハナーン：とても綺麗。また、家族で歩けたらいいのに。ここに来ても、全ては忘れられないけど、考えるのをやめて、少しだけ楽になるの。すごく疲れて、死んだら楽になるだろうって思うことがある。
語り手：レバノン に来てから人が変わってしまった兄、ムスタファ。きっかけとなった事件がありました。ある日、公安に拘束されたのです。滞在許可を持っていなくて、タバコを吸ってたらドラッグだと思われた。「今度、捕まえたらシリアに帰す」と言われた。シリアへ帰ったら無理やり戦争に参加させられる。

語り手：レバノン　政府はシリア難民に対し、滞在許可の取得を求めています。しかし、その費用を払えず8割近くの人が滞在許可のないまま避難生活を続けています。ムスタファも「滞在許可がないことでシリアに送還させられるのでは？」と神経をとがらせています。

ムスタファ：毎日が怖い。歩いていても怖くてたまらない。通りで物乞いをして酒を一本買って、酔っ払って帰る。ストレスがある中で酔うと、家族をナイフで脅かしてしまいみんな逃げる。酔って帰ると攻撃してしまう。無意識で・・・。

語り手：ハナーンは、マラクの家で過ごすことが多くなっていました。
ハナーン：お兄ちゃんがお母さんまで殴ってまた家の物も壊して、しばらくここに隠れていたいの。
マラク：ここにいるのはもちろんいいわよ。だけど、お兄さんから逃げても問題は解決しないわよ。ずっと隠れていて　いいと思う？
ハナーン：でも、帰ったら　殴られたり・・・
マラク：あなたはもっと強くなるべきよ。もっと強くなって、お兄さんに家族のことをちゃんと話してみたら？

語り手：兄にあがらうことなく、ただ黙っているハナーンに、マラクは変わって欲しいと思っていました。

語り手：翌日、マラクはムスタファを家に呼び出しました。ほとんど言葉を交わさなくなっていた兄に、自分の思いを伝えるようにハナーンに勧めました。

ハナーン：どうしてこうなったの？　私を殴り働かないでお金だけ欲しいと言うの？　お兄ちゃんのせいでお母さんは悲しんでいる。なぜ　私たちを殴るの？　どうして仕事を探さないの？
ムスタファ：今は仕事なんてない。コロナのせいで。
マラク：（タバコを吸おうとするムスタファに）　タバコはどうやって買ったの？　誰がタバコ代を稼いでる？　あなたを食べさせてるのは誰？　あなたの妹弟が3日間食べてないのを知ってる？
ムスタファ：僕にはお金も何もない。
ハナーン：わかった。でも、私に何ができる？　仕事がないからって私を叩くの？　コロナで働けないのは私も同じ。
マラク：あなたはこの状況を理解しなくちゃ。妹たちのそばで家族の面倒を見て！
ハナーン：私にとってはお兄ちゃんは何をしようとお兄ちゃんのまま。でも振る舞いが嫌なの。心の底からお兄ちゃんが好きなの。以前のお兄ちゃんに戻って欲しい。私たちを心配して、愛してくれた。
ムスタファ：わかった。叩かないよ。でも、叩かないようにイラつかせないで。
マラク：私はあなたを信じられない。何回も同じ言葉を言ったわよね。今度、彼女を叩いたら警察に通報する。
ムスタファ：わかった。殴らないようにする。
マラク：“殴らないように”ではなく、絶対じゃないの？
ムスタファ：絶対じゃない。
ハナーン：もし、今度叩いたら、私は家を出る。もうお金も持ってこない。私は働かない。
家を出たら帰らないから。
マラク：私のところへいらっしゃい。あなたは私に妹を渡すのね。
ムスタファ：いいや。
マラク：あなたの頭でよく考えなさい。これ以上、大切なものを失わないようにして。
ムスタファ：僕は・・・叩かないようにする。妹を叩かないようにする。なるべく外で過ごせば叩くこともない。自分を抑えられなくなるんだよ。だから、絶対って自分が信じられないんだよ。

語り手：シリア難民の治療に当たってきた精神科医（アブデル　サテルさん）は、男性が抱え込むストレスが

家族関係に大きく影響していると指摘しています。
精神科医：難民の男性の多くが、精神的な問題を抱えていると私は確信しています。神経質になり、暴力的になり、感情を抑えられなくなってしまう。それは、妻と子供の精神状態を悪化させます。つまり、多くの難民家族にストレスの連鎖があるのです。

金本ディレクター：コロナ禍で広がるストレスの連鎖。その吐口とされ傷ついた何人の女性たちと出会いました。国連機関（2019 年 UN Women） の調査では、シリア難民の女性の6割以上が家庭などで暴力にさらされている、と言います。（女性を叩く男性の様子が映される） 今、コロナの感染拡大と共に、世界で急増するドメスティック・バイオレンス（家庭内暴力）。それは、とりわけ難民家庭の中で深刻になっていました。

語り手：マラクが親しくしていた難民家族の父親が、突然亡くなりました。
マラク：知らせを聞いて3日間、頭痛が続いた。家族のことを思うと、とても悲しくて。少しだけど、お悔やみの砂糖を持っていきます。（家族の家に入る） 大丈夫ですか？（亡くなった父親の息子が小さな子を抱いている） （小さな子に話しかける） 元気？ かわいい子。
息子：この子たちはおじいさんが死んだと理解していない。でも、時々「おじいちゃん」と言う。
マラク：お母さんは大丈夫？
息子：母は寝込んでいます。僕らはまだ、悲しみから抜け出せてない。
マラク：お父さんはストレスを溜め込んでいたのね。（息子の苦悩の表情）

（難民の実情を伝えるために焼身自殺の映像が流される）
語り手：それは 4 日前の朝、家の前の空き地でのことでした。
動画撮影者：ああ、神よ。なんてことを。神よ、お助けください。
語り手：父親は、焼身自殺を図りました。
妹：息が詰まりそうだった。私のお兄さんだもの。
語り手：父親はすぐに病院に運ばれましたが、重度の火傷を全身に負い、手の施しようがありませんでした。
息子：「父さん、どうしてこんなことを？」と聞いた。父は言った「もう耐えられない。パン1袋も買えないようなこんな暮らしでいいのか？」
語り手：息子と孫、9 人の家族を抱えていた男性は、52 歳で亡くなりました。
息子：冬、仕事は少なくなった。これが始まりだった。それから、デモが起きた。デモが止まったら、コロナだ。コロナは外出禁止。外出禁止で誰も動けない。麻痺する。溜まっていく家賃をどう払えばいいのか？
マラク：あなたの言う通り、コロナはシリア人みんなを麻痺させている。
息子：コロナで仕事は完全になくなり、全てが閉ざされた。父が焼身自殺したのは、この状況を世界に伝えるためだ。僕らがどう感じているか？ ひもじさ、子供や老人の飢え、みんなにわかってもらおうと、父は命を絶った。でも、僕は誰の共感もいらない。大切な人が死んでしまって、何の意味があるんだ？ この疎外感の中で、シリア人は飢えで死んでいる。レバノン 中のシリア難民の状況を見て欲しい。世界は確実に僕らのことを忘れた。何千人もが飢えて死にそうなんだ。僕らだけの話をしてるんじゃない。この先、みんなに起こるかもしれないと心配している。もしこれ以上飢えたら、シリア人は爆発する。自ら命を断つ人も多くなるだろう。暮らしていけないから。子供が飢えるのを見るより死んでしまった方が楽だ。

40:40～45:16 5 分弱
金本ディレクター：世界は僕らのことを忘れた。私はやりきれない思いを抱えたまま、5 月、臨時便でレバノン を発ちます。その3ヶ月後、2020 年 8 月 4 日、レバノン の首都ベイルートで大規模な爆発事故が起きます。41:10 （けが人が運び込まれる動画） 建設現場などで働いていた多くのシリア難民とその家族が犠牲となりました。

母親：この子は今、全てのことにおびえている。流れる息子の血を止められないのが本当に辛かった。

語り手：大型病院が破壊され、20以上の診療所が損傷。医療現場も崩壊の危機にさらされました。事故から2週間で、コロナの新規感染者も倍増。難民キャンプで暮らす難民にも、感染が広がっていました。

女の子：私はもう外に行けないの。お父さんがダメって。お父さんは重い病気だから。
語り手：父親は、診療所の医師に感染の疑いがあると指摘され、ＰＣＲ検査を受けました。陽性と判明しましたが自宅療養を指示されたと言います。

家族：少しでも飲んで。
語り手：水とタオルで体を冷やすだけの状態です。
家族：夫は弱っている。熱で一晩中、一睡もしなかったから。

父親：私たち家族は10日間、外へ出ていない。我が家には小さな子どもがいるから心配だ。今は、とても疲れている。私の声が皆さんに届くことを願っている。

（ベイルートの破壊された状況の動画）
語り手：難民を支援する国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）は爆発事故で著しい被害を受けた2万5千世帯から支援を始めました。さらに、コロナに感染した難民を安全に収容する隔離ユニットを増設しました。しかし、支援は十分に行き届いてはいません。
UNHCR　レバノン　代表　ミレイユ・ジラールさん：レバノン　にいるシリア難民の極貧層は
（1　日の支出が2.9ドル以下）73％に達しています。生存ギリギリを強いられている人々です。今、この極貧層は大規模爆発、コロナ、経済危機によって増加し、難民の90％になろうとしており、私たちは途方に暮れています。援助を求められてもある家族は支援し、ある家族は断らざるを得ません。私たち支援者にとってはとても辛いことです。レバノン　で人道支援に携わる者は皆、燃え尽きています。声を大にして伝えたいのです。私たちだけでは、難民もレバノン　人も救うことはできません。苦闘している彼らに、国際社会は手を差し伸べるべきです。　44:40

金本ディレクター：日本に帰国後、私が感じたことがあります。コロナ禍で、誰もが自分のことで手一杯になり、私を含め、難民の人々を忘れてしまっているのではないか？　今でも心に強く残っているのは、困難に負けまいと自らの力で生きていこうとしていた人々の姿です。　45:16
レバノンを離れる直前の５月、私はマラクを訪ねました。記憶に残るマラクの言葉があります。

マラク：シリア人女性は仕事をしてお金を得て強くならなくては。支援を待つよりも私たちが働いて自立できたら・・・。自分を信じて、働いて！　額に汗をかいて。
金本ディレクター：マラクは、新しい仕事を見つけていました。
マラク：コロナのためのマスクを作っている。
金本ディレクター：あちこちの工場に連絡し、ようやく注文が取れました。一日、300枚のマスクを作っています。地域の難民女性が働く場を、マラクは少しずつ切り開こうとしています。

兄を誘拐され失ったエルハーム。レバノン　で最後に取材した時、食料品店から野菜の下ごしらえの仕事を請け負っていました。
エルハーム：（妹に声をかける）　偉いね。頑張って、（ニンニクを）むいてるね。お兄ちゃんの代わりに、私が元気に働かなくちゃ。妹たちが誰にも傷つけられないように、私が妹たちを守り助け合っていく。
金本ディレクター：レバノン　で別れてから4ヶ月（9 月 15 日）、エルハームに近況を聞きました。
エルハーム：お父さんが事故にあったの。仕事を探すために道に立っていたら、車にぶつけられて数軒先のお店まで跳ね飛ばされたの。お父さんはすごい大怪我だった。それから私と妹はゴミ置き場で働いてるの。“ごみ女”とか悪口も言われているけど・・・。1 日、ゴミを集めて約 100 円になる。それで妹たちにパンと

ミルク一箱を買ってやっと食べさせられるの。(涙を拭う) 私が働かなくちゃ。お兄ちゃんがとても恋しい。みんながこういう状況にならないで欲しい。私たちに起きたことが繰り返されないことを願っている。 48:33

柴田神父が難民支援を始めたきっかけ

2015 年 9 月: シリア難民の 3 歳のアイラン君がトルコの海岸に打ち上げられた写真を見ました。アイラン君の 4 人家族が乗っていた難民ボートはギリシャ領の島に向かう途中で沈没し、お父さんだけが助かりました。(https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/15/090700247/)

12 月:難民のことを知ろうと「なぜドイツはシリア難民を受け入れるのか？」のシンポジウムを聞きました。今は日本の大学で先生をされているハンガリー出身の方の実体験が心を動かしました。

1965 年ハンガリー動乱のクリスマスのころ、10 歳の私は家族とハンガリーを離れることになった。「自分は難民になる。家もなくなる、国もなくなる・・・これからどうなるの？不安でいっぱいだった」そんなとき、駅で、同じ年くらいのドイツの子どもが箱をくれた。きっと、言葉が違う私たちに何かを感じたのでしょう。開けてみると中にケーキが入っていた。 きっと楽しみにしていたクリスマスケーキだったでしょう。 自分は難民になる・・不安・・・「でも、いいこともある。そう思って頑張ってこれた。50 年経っても忘れられない。思い出すと涙が出てくる。」

優しい気持ちが難民を支え続けた→子どもたちの善意には力がある→難民支援協会への募金

難民支援協会へ募金する理由(https://www.refugee.or.jp)

・現地に直接支援を届けるのは難しい現状があります。

・命の危険に晒されて最初にビザが降りたのがたまたま日本だった人が多いです。日本は観光ビザを割と簡単におろします。けれども、難民認定のハードルはとても高く試練が待っています。昨年 10,375 人が申請しましたが 44 人しか認められませんでした。(難民認定率は、日本:0.4% ドイツ:26%、アメリカ:30%、カナダ:56% 先進国の中で日本はとりわけ低くなっています)

・日本にたどり着いたものの、すぐに所持金が尽きて路上生活になる難民がいます。せっかく助かった命のために何かしたい。その人たちを助けるのが難民支援協会です。

・ユニセフ(国連児童基金)は、国際支援の機関として知られていますが、募金の約2割は広報費に当てられています。また自分が献金した分が、いつどのように使われたのかのフィードバックもありません。難民支援協会ですと使われ方の報告があります。

一例

2016年1月、アフリカのコンゴ民主共和国から園児さんと同じくらいの 2 人のお子さんを連れて、逃れてきたお父さんがおられました。難民支援協会が 19 部屋確保している一時宿泊施設は他の難民の方で満室でした。でも、小さなお子さん 2 人が寒空の下で過ごすのはあまりにも酷だと心を痛めました。幼稚園のクリ

スマス募金、子どもたちがいろいろなことを我慢して、たとえば、大好きなおもちゃのガチャガチャや、お菓子を我慢した募金で、急遽、ホテルを手配しました。この家族を野宿から助けることができました。お父さんは子どもたちを守るためにも必死です。子どもたちはその様子を察してか、とてもお利口で、泣くこともわがままを言うこともなく、お父さんの横にぴったりついて、相談が終わるのを静かに待っています。ホテルは事務所から一駅以上離れたところにありますが、いつも一緒に事務所まで歩いて来られ、私たちは健気な子どもたちの姿にいつも心を打たれます。日本で生活していくことは一人でも家族でも簡単ではありません。献金は、この家族をはじめ今必要とされる皆さんのために使われました。

園児さんのお祈り「こまっているおともだちが　あぶないくにから　あぶなくないくにに　もどれますように」
https://www.refugee.or.jp/jar/report/2016/01/21-0004.shtml

・今年は、コロナ・ウイルスの影響で、支援活動も難しくなっています。また、せっかく手に職をつけた方が失職しています。(https://www.refugee.or.jp/jar/report/2020/10/07-0000.shtml)

・今、最も支援が必要な方へ難民支援協会は募金を活用してくださいます。

馬小屋で生まれたイエス様は、その後すぐヘロデ王に命を狙われ、エジプトに避難します。言葉も通じず、頼れる人もいない不自由な生活を 3 人は強いられます。つまり、イエス様の家族は難民でした。そして、成人したイエス様は世界中の人のために十字架に架けられます。今も、難民をはじめとする人々は苦しんでいます。

クリスマスをケーキやプレゼントを楽しむだけでなく、難民として生まれてくる救い主イエス様を迎える時にしましょう。難民への募金もどうかよろしくお願いします。